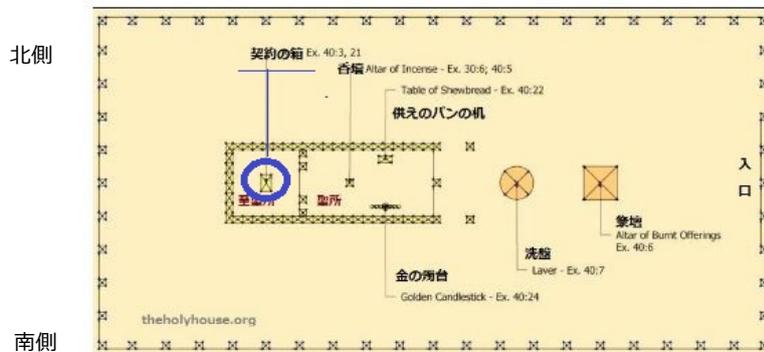


契約の箱の上に置かれた
「贖いのふた」に象徴されるイエシュア



ベレーシート

●シリーズ「神の御住まい」における最も聖なる所である「至聖所」に至りました。聖書における幕屋の言及の順としては「契約の箱」が最初に来ますが、私たちがそこへ近づくためには、門から入って、大庭を通り、そして聖所を通って至聖所に至るため、逆の順でこれまで学んできました。至聖所には、契約の箱とその上に置かれている「贖いのふた」という二つ



のものがあります。右図で見るように、「契約の箱」と「贖いのふた」は、至聖所にある一つのものとして理解されやすいのですが、実はこの二つは全く別の目的で造られているのです。そこで今回は、「贖いのふた」に限定して、そこに啓示されている神の秘密を見たいと思います。まずは、「贖いのふた」について言及されている聖書箇所を見てみたいと思います。次回は、「契約の箱」とその中に納められている三つのものについて目を留める予定です。

【新改訳改訂第3版】出エジプト記 25章 17～22節

- 17 また、純金の『贖いのふた』を作る。長さは二キュビト半、幅は一キュビト半。
- 18 槌で打って作った二つの金のケルビムを『贖いのふた』の両端に作る。
- 19 一つのケルブは一方の端に、他のケルブは他方の端に作る。ケルビムを『贖いのふた』の一部としてその両端に作らなければならない。
- 20 ケルビムは翼を上の方に伸べ広げ、その翼で『贖いのふた』をおおうようにする。互に向かい合って、ケルビムの顔が『贖いのふた』に向かうようにしなければならない。
- 21 その『贖いのふた』を箱の上に載せる。箱の中には、わたしが与えるさとしを納めなければならない。
- 22 わたしはそこであなたと会話し、その『贖いのふた』の上から、すなわちあかしの箱の上の二つのケルビムの間から、イスラエル人について、あなたに命じることをことごとくあなたに語ろう。

●幕屋は「神と人とが共に住む家」ですが、その家が「黄金の家」と呼ばれるのには理由があります。外から見る幕屋は決して見栄えの良いものではありませんが、幕屋の聖所の内側にある立板、柱、パンの机、燭台、香壇はすべて金で作られています。また、至聖所にある契約の箱とその上に置かれている「贖いのふた」も純金で作られています。特に、「燭台」と「贖いのふた」の上にある「ケルビム」は純金を槌で打って作るという、デザインも含めて、極めて高度な技術を見ることができます。もし、聖所と至聖所とを隔てている垂れ幕が引き裂かれて、そこに燭台の灯がともされるなら、この世とは思えないほどの、輝くばかりの美しい空間となるに違いありません。地上における幕屋は、目に見えない天における神の家の「写し」です。幕屋には、神と人とが共に住む神の家として、またその家を建てることを天の父からゆだねられた神の御子イエシュアのあらゆる面(本質と働き)が描き出されているのです。幕屋を見ること(=知ること)は、イエシュアを見ること(=知ること)になるのです。

1. 「贖いのふた」とそれを翼でおおっているケルビム

●右の図は、「贖いのふた」とそれを翼でおおっているケルビムのデザインです。ケルビムは「贖いのふた」の一部です。今の時代はこうしてレプリカとして見ることはできますが、もし、旧約時代にモーセの幕屋の「贖いのふた」をまともに見たとしたらどうなるでしょうか。確実に死にます。「贖いのふた」は、大祭司のみ、しかも年に一度だけ、「贖罪の日」に入念な段取りを踏み、香炉の煙が立ち込める至聖所の中でぼんやりと見るしかできないものでした。後で述べることとなりますが、大祭司はその「贖いのふた」に血を注ぐことで、罪が覆われ、赦されたのです。「贖いのふた」は神と人とを結ぶきわめて聖なるものであったのです。



(1) 「贖いのふた」という語彙

●「贖いのふた」のことを、ヘブル人への手紙 9 章 5 節では、「贖罪蓋」と表記しています。聖書にはふりがながふってあるので「しょくざいがい」と読めますが、漢字だけの表記では読めません。また「蓋」という字は書くのも難しい漢字ですから、新改訳の場合、ヘブル人への手紙 9 章 5 節のみ「贖罪蓋」としていますが、他は、「贖いのふた」とひらがなで表記しています。

●この「贖いのふた」をギリシア語、ヘブル語、英語、日本語で表記すると以下ようになります。

- (1) ギリシア語「ヒラステーリオン」(ἱλαστήριον) (2) ヘブル語「カポーレット」(קַפֹּוֹרֶט)
 (3) 英語「マースイー・シート」(mercy seat) (4) 日本語 ①「贖罪蓋」「贖いのふた」(新改訳)
 ②「償いの座」(新共同訳) ③「贖罪板」(岩波訳) ④「贖罪所」(口語訳・バルナバ訳・塚本訳)
 ⑤「贖いの蓋」(エマオ訳) ⑥「恵みの座」(LB・柳生訳) ⑦「あがないの座」(フランシスコ会訳)
 ⑧「贖罪の座」(新和訳) ⑨「あわれみの座」(篠遠訳)

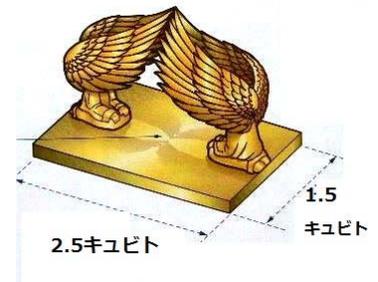
מִשְׁכָּן

●特に、ヘブル語の「カポーレット」(כַּפֹּרֶת)の語源である「カーファル」(כַּפַּר)は「塗る」という意味で、ノアが箱舟に水が入らないように内と外を**やに**(タール)で塗ったとあるように(創世記 6:14)、そこから「なだめる」「償う」「贖う」「赦す」という意味が派生しています。まさに、至聖所の「契約の箱」の上に置かれた「贖いのふた」はそのような意味で使われています。

(2) 「贖いのふた」を翼でおおっている栄光のケルビム

●「ケルビム」(「ケルヴィーム」 כְּרֻבִים)は、「ケルブ」(「ケルーヴ」 כְּרֻב)の複数形です。「ケルビム」は、天の軍勢のうちで、神の御座に最も近い場所を占めている翼を持った天的存在です。ケルビムが聖書で最初に登場するのは、創世記 3 章 24 節です。かつて、エデンの園に置かれたアダムとエバが「善悪の知識の木の実」を食べたことで、神は彼らをエデンの園から追放されました。そのとき神はアダムとエバが自分勝手にエデンの園に戻り、自分勝手にいのちの木から取って食べて永遠に生きることをしないようにと、エデンの園の東の門に門番としてケルビムと回る炎の剣を置かれました。そのことを表わす「型」が、幕屋の至聖所の「契約の箱」の上に置かれた「贖いのふた」のケルビムです。

●「贖いのふた」でのケルビムの翼の寸法は 2.5 キュビト弱ですが、ソロモン神殿では両方のケルブの翼は合わせて 10 キュビトと記されています(1 列王 6:24)。ソロモン神殿はモーセの幕屋よりも規模がほぼ 3 倍と拡大していますが、10 キュビト(約 4.65m)は驚くような大きさです。しかもそれが純金で作られていたことを思うとすごいことです。しかしより**重要なこと**はそのケルビムが存在する目的と彼らの見ているものです。



●「ケルビムは翼を上の方に伸べ広げ、その翼で『贖いのふた』をおおうようにする。」(出 25:20)にある「**おお**う」と訳されたヘブル語の「サーファフ」(סָפַף)は、本来、武装するという意味ですが、詩篇 91 篇 4 節に、「主は、ご自分の羽で、あなたを**おお**われる。あなたはその翼の下に身を避ける」とあるように、武器である「大盾」、「とりで」、そして「羽」や「翼」は神の恩寵的防衛の比喻です。翼でおおわれている所はきわめて「安全で、かつ休息」が保障されているのです。しかも、ケルビムの翼がおおっている場所が「贖いのふた」なのです。

(3) ケルビムの目はいったい何を見ているのか

●しかし、ケルビムが互いに向き合って見つめているのは、単なる「贖いのふた」ではなく、そこに注がれた「**血**」です。この血は天と地をつなぐことになる「血」だからです。この血なしには、人は決してエデンの園に戻ることはできないのです。ケルビムが置かれた「贖いのふた」は、天にある「エデンの園」と地上を結ぶ聖なる場所なのです。ケルビムの務めは、追放された人が再び「エデンの園」に入るための条件を満たしているかどうかを見張ることです。「ケルビム」は向き合う形で置かれてはいますが、互いに相手の顔を見合っているわけではありません。贖いのふたの上に、天に通じる**贖いの血**が注がれているかどうかを見張

っているのです。なぜなら、その場所こそ、神がこの地上に祝福かのろいかをもたらす分岐点となっているからです。

2. 年一度の「贖いの日」について

●贖罪の日には、大祭司アロンは次のような入念の準備をして聖所(至聖所)に入らなければなりませんでした。

(1) 自分自身と家族のための贖いをする

●大祭司は自分自身と自分の家族のための罪の贖いのために、「罪のためのいけにえ」として若い雄牛(「バル」 בָּרַךְ)と「全焼のいけにえ」として雄羊(「アイル」 אֵילִם)を携える必要がありました。

【新改訳改訂第3版】レビ記 16章 11～14節

- 11 アロンは自分の罪のためのいけにえの雄牛をささげ、自分と自分の家族のために贖いをする。彼は自分の罪のためのいけにえの雄牛をほふる。
- 12 【主】の前の祭壇から、火皿いっぱい炭火と、両手いっぱいの粉にしたかおりの高い香とを取り、垂れ幕の内側に持って入る。
- 13 その香を【主】の前の火にくべ、香から出る雲があかしの箱の上の『贖いのふた』をおおうようにする。彼が死ぬことのないためである。
- 14 彼は雄牛の血を取り、指で『贖いのふた』の東側に振りかけ、また指で七たびその血を『贖いのふた』の前に振りかけなければならない。

●上記の 11～14 節には贖罪のための厳粛な手順が記されています。まとめると、

- ① 罪のためのいけにえとなる「雄牛」をほふる。
- ② 「主の前の祭壇」、すなわち「香壇」にある「火皿」(香炉)と両手いっぱいの香を取って、垂れ幕の内側にそれを持って入り、至聖所を香の煙で満たすようにする。それは罪ある人間がそこに顕現される神を直接見て死なないためです。大祭司アロンが至聖所に入るのはこれが最初です。
- ③ ほふった雄牛の血の一部を、指で『贖いのふた』の東側に振りかけ、また指で七たびその血を『贖いのふた』の前に振りかける。それは主が顕現される場所をきよめるためです。大祭司アロンが至聖所に入るのはこれで二度目です。

(2) 普通の祭司の衣服を身に着ける

【新改訳改訂第3版】レビ記 16章 4節

聖なる亜麻布の長服を着、亜麻布のももひきをはき、亜麻布の飾り帯を締め、亜麻布のかぶり物をかぶらなければならない。これらが聖なる装束であって、彼はからだに水を浴び、それらを着ける。

●一年のうちで最も聖なることをする「贖いの日」には、大祭司は大祭司の装束ではなく、普通の祭司の装束を身につけなければなりません。これは主の前におけるへりくだりを意味します。

(3) 民のための贖いのために



●二頭のやぎ(雄やぎを意味する「サーイール」**שְׁעִיר**)を「会見の天幕の入口」(=聖所)の前に立たせるのは、民の罪のための贖いをするためです。16章7～10節にあるように、くじを引いて一頭を「**主のため**」に、もう一頭を「**アザゼルのため**」としました。

【新改訳改訂第3版】レビ記 16章 21～23節

21 アロンは生きているやぎの頭に両手を置き、イスラエル人のすべての咎と、すべてのそむきを、どんな罪であっても、これを全部それの上に告白し、これらをそのやぎの頭の上に置き、係りの者の手でこれを荒野に放つ。

22 そのやぎは、彼らのすべての咎をその上に負って、不毛の地へ行く。彼はそのやぎを荒野に放つ。

●「アザゼル」(原語は「アザーゼール」**אֲזַאזֵל**)は、レビ記 16章に4回(8, 10, 10, 26節)登場します。これは「やぎ」を意味する「エース」(**עֵז**)と、「立ち去る、消え失せる」を意味する「アーザル」(**אָזַל**)の複合語と考えられます。「**主のため**」とされたやぎは罪のためのいけにえとしてほふられ、その血をもって至聖所に入り、聖所全体の贖いをすることで、民の罪は赦され、神と人との交わりが可能となり、神に近づくことができるようになるのです。他方、「**アザゼルのため**」とされたやぎは、大祭司がそのやぎの頭に両手を置き、イスラエル人の民のすべての咎(「アーヴォーン」**אָוֹן**)とすべての背きの罪(「ペシャ」**פֶּשָׁע**)、そして「**的外れ**」を意味する「罪」(「ハッタート」**חַטָּאת**)を告白してそのやぎに負わせます。そしてそのやぎを「係りの者の手で」荒野(不毛の地、人里離れた地、無人の地)に放ちます。「放つ」とは決して戻って来ないように追いやることを意味します。つまり、それは神が民の罪を忘れ去ることを意味しているのです。このことに関する他の聖書箇所は以下の通りです。

① 詩篇 103篇 12節

「東が西から遠く離れているように、私たちのそむきの罪を私たちから遠く離される。」

② イザヤ書 38章 17節

「ああ、私の苦しんだ苦しみが平安のためでした。あなたは、滅びの穴から、私のたましいを引き戻されました。あなたは私のすべての罪を、あなたのうしろに投げやられました。」

●これは、何という神の恵み、神のあわれみでしょうか。ここには「贖いの二面性」があります。二面性とは、血による贖いによって大胆に神に近づくことを得させるという面と、神に対する罪が神によって全く取り去られるだけでなく、神の記憶から消し去られ、忘れ去られるという面を意味しているのです。このように、「贖い」とは神のさばきからおおわれるだけでなく、罪が赦されることでもあるのです。

3. 「贖いのふた」に象徴されるイエシュア

●「主のためのやぎ」と「アザゼルのためのやぎ」は「贖いの二面性」を啓示しています。それは神の御子イエシュアによる贖いの型なのです。そのことをヘブル人への手紙は以下のように記しています。

【新改訳改訂第3版】ヘブル書 10章 19～20節

19 こういうわけですから、兄弟たち。私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所に入ることができるのです。
20 イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのためにこの新しい生ける道を設けてくださったのです。

【新改訳改訂第3版】ヘブル書 10章 17節

「わたしは、もはや決して彼らの罪と不法とを思い出すことはしない。」

(1) 「贖いのふた」は、新約では「なだめの供え物」と表現される

●今回は、至聖所にある「契約の箱」の上に置かれている「贖いのふた」に注目していますが、「贖いのふた」を意味するギリシア語の「ヒラステリオン」(ἱλαστήριον)は、ローマ書 3章 25節では「**なだめの供え物**」と訳されています。「神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、**なだめの供え物**として、公にお示しになりました。」とパウロは述べていますが、この「なだめの供え物」はまさに幕屋用語です。ところが使徒パウロは、異邦人であるローマの人々に対して何の説明もなくそれを使っています。また、使徒ヨハネも然りです。

【新改訳改訂第3版】Iヨハネ 2章 2節 /4章 10節

2:2 この方(義なるイエス・キリスト)こそ、私たちの罪のための——私たちの罪だけでなく、世全体のための——**なだめの供え物**です。

4:10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、**なだめの供え物**としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。

【新改訳改訂第3版】ヘブル人への手紙 2章 17節

そういうわけで、神のことについて、あわれみ深い、忠実な大祭司となるため、主はすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません。それは民の罪のために、なだめがなされるためなのです。

●「なだめる」「なだめの供え物」とは、**罪に対する神の怒りをなだめること**を意味します。旧約においては、この「贖いのふた」の場所(あわれみの座)に血が注がれることなしには罪の赦しはなかったのです。この血が「贖いのふた」に注がれたのは、年一度の「贖いの日」でした。

(2) 「年一度」から、永遠の「ただ一度」へ

●レビ記 16章には、年一度の「贖いの日」について詳しく取り上げられています。主の例祭の中の「贖罪

מִשְׁכּוֹן

の日) (「ヨーム・キップール」 כּוֹפֵר יוֹם)は、一年で最も厳粛な日という意味で「大贖罪日」とも呼ばれます。大祭司が至聖所に入ることのできる日は、レビ記 16 章 34 節に記されているように、「年に一度」限りです。なにゆえに「年に一度」だけなのでしょう。それはイスラエルの民の罪の贖いの有効期間が一年だからです。それゆえ、毎年、それが行なわれるように「主の例祭」の中に位置づけられているのです。しかし、この「年に一度」という規定は、やがて大祭司となられるイエシュアによって「ただ一度」、ご自身の血による永遠の贖いが成し遂げられることの「型」であったのです。

【新改訳改訂第3版】ヘブル人への手紙 9 章 25～26 節

25 それも、年ごとに自分の血でない血を携えて聖所に入る大祭司とは違って、キリストは、ご自分を幾度もささげることにはさいません。

26 もしそうでなかったら、世の初めから幾度も苦難を受けなければならなかったでしょう。しかしキリストは、ただ一度、今の世の終わりに、ご自身をいけにえとして罪を取り除くために、来られたのです。

【新改訳改訂第3版】ヘブル人への手紙 10 章 10～14 節

10 このみこころに従って、イエス・キリストのからだは、ただ一度だけささげられたことにより、私たちは聖なるものとされているのです。

11 また、すべて祭司は毎日立って礼拝の務めをなし、同じいけにえをくり返しささげますが、それらは決して罪を除き去ることができません。

12 しかし、キリストは、罪のために一つの永遠のいけにえをささげて後、神の右の座に着き、

13 それからは、その敵がご自分の足台となるのを待っておられるのです。

14 キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によって、永遠に全うされたのです。

- 「ただ一度」「一つの永遠のいけにえ」「一つのささげ物」というフレーズを心にしっかりと留めましょう。

(3) 「なだめの供え物」となったださったイエシュア

●もし、その場所に「なだめの供え物」としての御子イエシュアの贖いの血が注がれているならば、罪が完全に赦され、義とされて(神との関係が法的に回復されて)、天に通じるいのちの門が開かれます。その結果、天にある神のすべての霊的な祝福を受けることができるのです。それのみならず、何よりも重要なことは、神と語り合うことができるということです。事実、モーセは、主と語るために会見の天幕に入ると、あかしの箱の上にある「贖いのふた」の二つのケルビムの間から、彼に語られる御声を聞いたと記されています(民数記 7:89)。

●旧約の幕屋において神の声を聞くことのできた人物はモーセひとりだけでしたが、今や、主にある者たちがみなモーセと同様に神の声を直接聞くことのできる立場にあるのです。それはひとえに、イエシュアが流して下さった尊い血潮によるものなのです。

- ヘブル人への手紙の著者は、旧約の「贖罪の日」が意味するところの本当の意味を明らかにすると同時に、

律法の定める「アザゼルのための雄やぎ」による贖罪の欠陥を指摘しています。その欠陥とは、「年ごとに罪の記憶が戻ってくる」(ヘブル 10:1~3)ことにあります。年ごとに犠牲が繰り返さざらなければならないのは、「贖罪の日」の贖いの効力が一年間という期間限定であったからです。しかしイエシュアの血による贖いは、完全な一回性の贖いであり、しかもその効力は永遠に有効なのです。

4. 「御国の福音」の視点から見た「贖罪の日」の預言的意義

●レビ記 16 章はそもそも神の民としてのイスラエルの民族的な贖罪が記されている箇所です。個人的な贖罪のみならず、全イスラエルの贖罪について記されているという点が重要です。

(1) アザゼルのためのやぎとされたイエシュア

●贖罪の日に、大祭司はイスラエルの民のもろもろの罪をアザゼルのためのやぎの上に置き、そのやぎを荒野に放しました。そしてそのやぎが決して帰って来ることがないように、係りの者の手で(=定められた者たちの手によって)、崖から突き落としたようです。実は、この「定められた者たちの手によって」ということが預言的です。神の御子イエシュアは大祭司カヤパの策謀によってアザゼルのためのやぎとされたからです。しかしそれはイエシュアが身代わりとなって、多くの人の罪を赦すための神のご計画が実現するために、カヤパの口を通して神が言わせたものだと言ハネは記しています。

【新改訳改訂第3版】ヨハネの福音書 11 章 48~52 節

48 もしあの人をこのまま放っておくなら、すべての人があの人を信じるようになる。そうすると、ローマ人がやって来て、われわれの土地も国民も奪い取ることになる。」

49 しかし、彼らのうちのひとりで、その年の大祭司であったカヤパが、彼らに言った。「あなたがたは全然、何もわかっていない。

50 ひとりの人が民の代わりに死んで、国民全体が減びないほうが、あなたがたにとって得策だということも、考へに入れていない。」

51 ところで、このことは彼が自分から言ったのではなくて、その年の大祭司であったので、イエスが国民のために死ぬうとしておられること、52 また、ただ国民のためだけでなく、散らされている神の子たちを一つに集めるためにも死ぬうとしておられることを、預言したのである。

●贖罪の日に、大祭司がイスラエルの民のもろもろの罪をアザゼルのやぎの上に置いて荒野に放し、そのやぎが決して帰って来ることがないように、定められた者たちの手によって崖から突き落としたように、イエシュアも大祭司カヤパによって同じようにされたのです。

(2) 神のご計画のマスタープランにおける「贖罪の日」の預言的意味

●神のご計画のマスタープランにおける、「贖罪の日」が指し示している預言的意味は、悔い改めによる全

イスラエルの民族的回心の実現です。神の側ではそのためのお膳立てはすでに整っていますが、全イスラエルの民の方が未だ整っていないのです。そのことに気づかせ、全イスラエルの民を民族的に悔い改めさせ主に立ち返らせることが、「贖罪の日」が目指していることです。神の民イスラエルが犯した最大の罪は神の御子イエシュアを拒絶しただけでなく、十字架につけたことです。さらには、やがて反キリストをメシアとして信じるようになります。そうした罪に気づかせるために、神は彼らに反キリストによる大患難を通させます。そしてそれは彼らに未曾有の苦難をもたらします。

●七年間の患難時代が置かれているその目的は、神の民イスラエルが最終的に神に立ち返るために必要な産みの苦しみであると言えます。旧約聖書は、神から離れた神の民であるイスラエルとユダの民の回復を、繰り返して、繰り返して預言しています。そのことを実現するために、神は大患難という産みの苦しみを与えます。「産みの苦しみ」とは新しい命が誕生するときどうしても通過しなければならない極度の苦しみのことですが、神のご計画のマスタープランにおいて、神の選びの民が悔い改めて神に立ち返るためには、そのような産みの苦しみを避けて通ることは出来ません。その苦しきは、「世の初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないようなひどい苦難」だとイエシュアが語っておられます(マタイ 24:21)。彼らは大患難を通して完全に追い詰められます。そしてその中で自分たちが拒絶したイエシュアこそ、メシアであることを知るようになるのです。具体的には、「恵みと哀願の霊」(ゼカリヤ 12:10)が注がれることによって、あるいは主の「息が吹きかけられる」(エゼキエル 37 章)ことによってです。それは万軍の主の熱心によって、将来、必ず実現されるのです。

●土地を七年毎に休ませる「安息年」の七倍である「ヨベルの年」もティシュレーの月の「贖罪の日」でした。「ヨベルの年」は「主の恵みの年」と呼ばれます。イエシュアは公生涯の開始時に、イザヤ書 61 章 1 節と 2 節の冒頭のみことばを引用して読まれました。以下の箇所はまさに「ヨベルの年」のメッセージです。

【新改訳改訂第 3 版】ルカの福音書 4 章 18~19 節

18 「わたしの上に主の御霊がおられる。主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油をそそがれたのだから。主はわたしを遣わされた。捕らわれ人には赦免を、盲人には目の開かれることを告げるために。しいたげられている人々を自由にし、19 **主の恵みの年を告げ知らせるために。**」

●イエシュアが地上再臨される時も、おそらくヨベルの年の「贖罪の日」と関連があるかもしれませんが、仮庵の祭りのあたりであることが予想されます。イスラエルに対する神の救いのドラマはこれからますます緊迫した段階へと入っていきませんが、キリストの花嫁とされた教会は、花婿なる方が来られるとき(空中携拳)を、「主よ。来てください。」と緊迫した思いで待ち望む必要があります。

●ひとたび、神に敵対したイスラエルの民にとって、「贖いのふた」に注がれたイエシュアの血潮は今もなお有効です。彼らに対する「神の安息にはいるための約束はまだ残っているのです」(ヘブル 4:1)。ここに、「贖いのふた」が「**恵みの座**」「**あわれみの座**」と呼ばれる所以があるのです。